絵馬に描かれた懐かしい風景

シリーズ・まちの文化財

第四回「四季耕作図絵馬」

絵馬の歴史は、生馬としての神馬献納という古代以来の信仰行事にまでさかのぼるものといわれています。この風習が時代とともに馬形の器物に変わり、さらに変遷をかさねて馬を描いた板（絵の板）を奉納するになったとされています。

大絵馬は、社寺に奉納される扁額（へんがく）で、結願（けつがん）や識恩（しきおん）、あるいは記念のためなど奉納の動機はさまざまですが、成立の背景には公開的な意味合いが強かったように考えられています。境内に絵馬舎や絵馬所が設けられた時期はよく分かりませんが、奉納の需要が多くなり、独立した場所が必要となったに違いありません。この絵馬所の意義は絵馬の保存だけでなく、参詣者にとってのギャラリー的要素があったことです。

そこで時代時代の絵師たちが腕をふるい、その時代の絵柄の大作を描き、多くの人々に見てもらおうとして奉納しました。したがって、これらの大絵馬は民俗学的、美術的資料として貴重な文化財となっています。

また香芝市には絵馬のことを「エンマ」と呼び、二十歳までの者が集まって隣村へ「エンマ」の寄進を頼む風習や、その年に誕生した

子供たちの氏子入りを示すために「エンマ」が奉納される風習があったといいます。したがって、香芝市五ヶ所にある厳島神社に奉納されていました「四季耕作図絵馬」の奉納には、そうした集落の人々の心が込められていたと思えます。

この「四季耕作図絵馬」は美術史上及び民俗学的に貴重な絵馬で、大きさは縦八十八センチメートル、横百八十八・五センチメートルで、画面には籾撒きから田植え、稲刈りなどを経て俵の蔵入れまで農作業の十二場面が鮮やかな色彩で描かれています。額の右縁が欠けていて明確な製作年代は分かりません。しかし元興寺文化財研究所保存科学センターの「奉納年の記載は無いが、青色の彩色に舶来のウルトラマンリンブルーが使用されていること、額装の四隅の組み方が明治時代の絵馬に多く見られる」ことなどから、おそらく明治中期とされています。

このような絵柄の絵馬は奈良県には他に五面しか残存しておらず、江戸時代後半から明治時代にかけての農村風俗を知る上での貴重な文化財となっています。そこで平成五年度に香芝市の有形民俗文化財に指定されました。